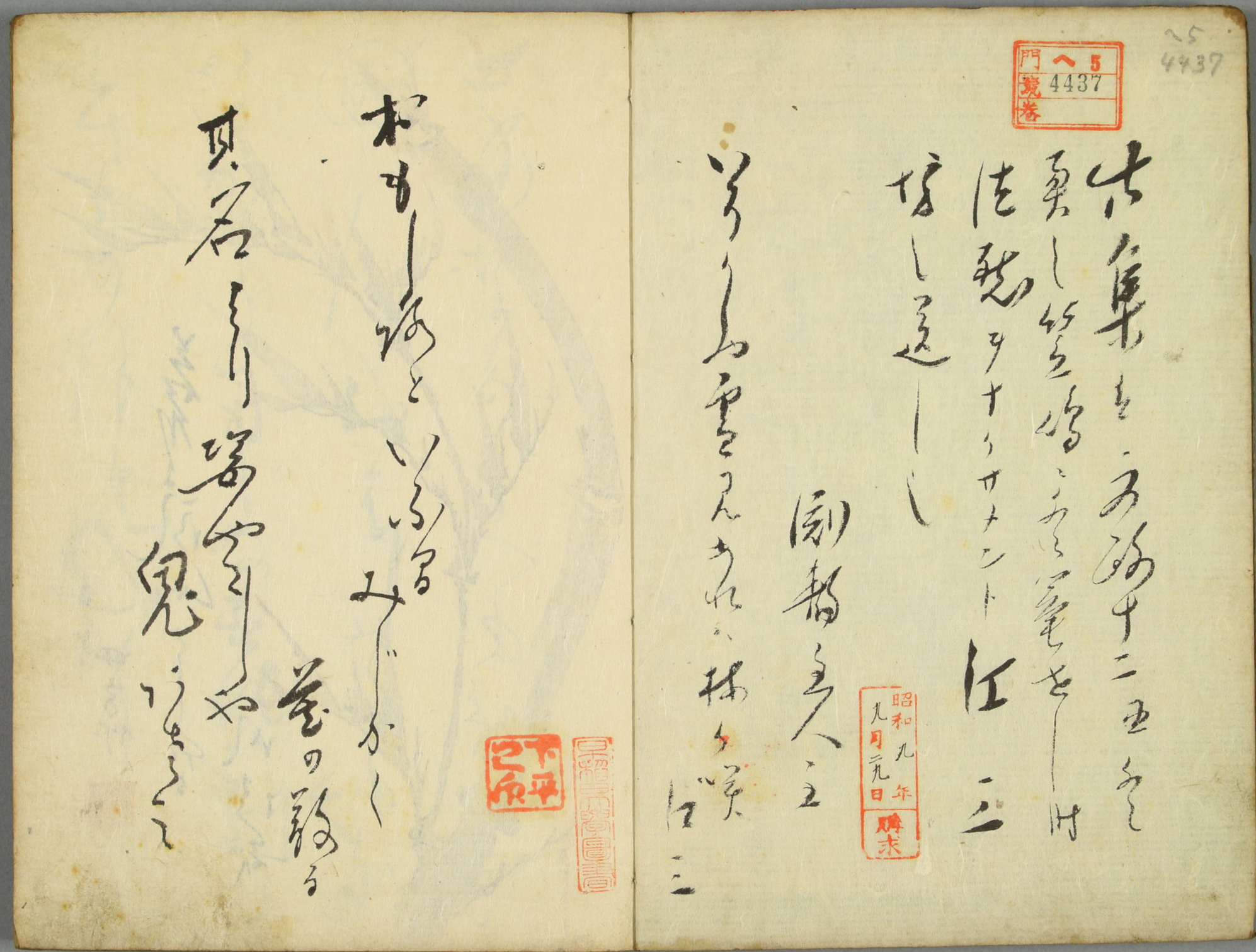
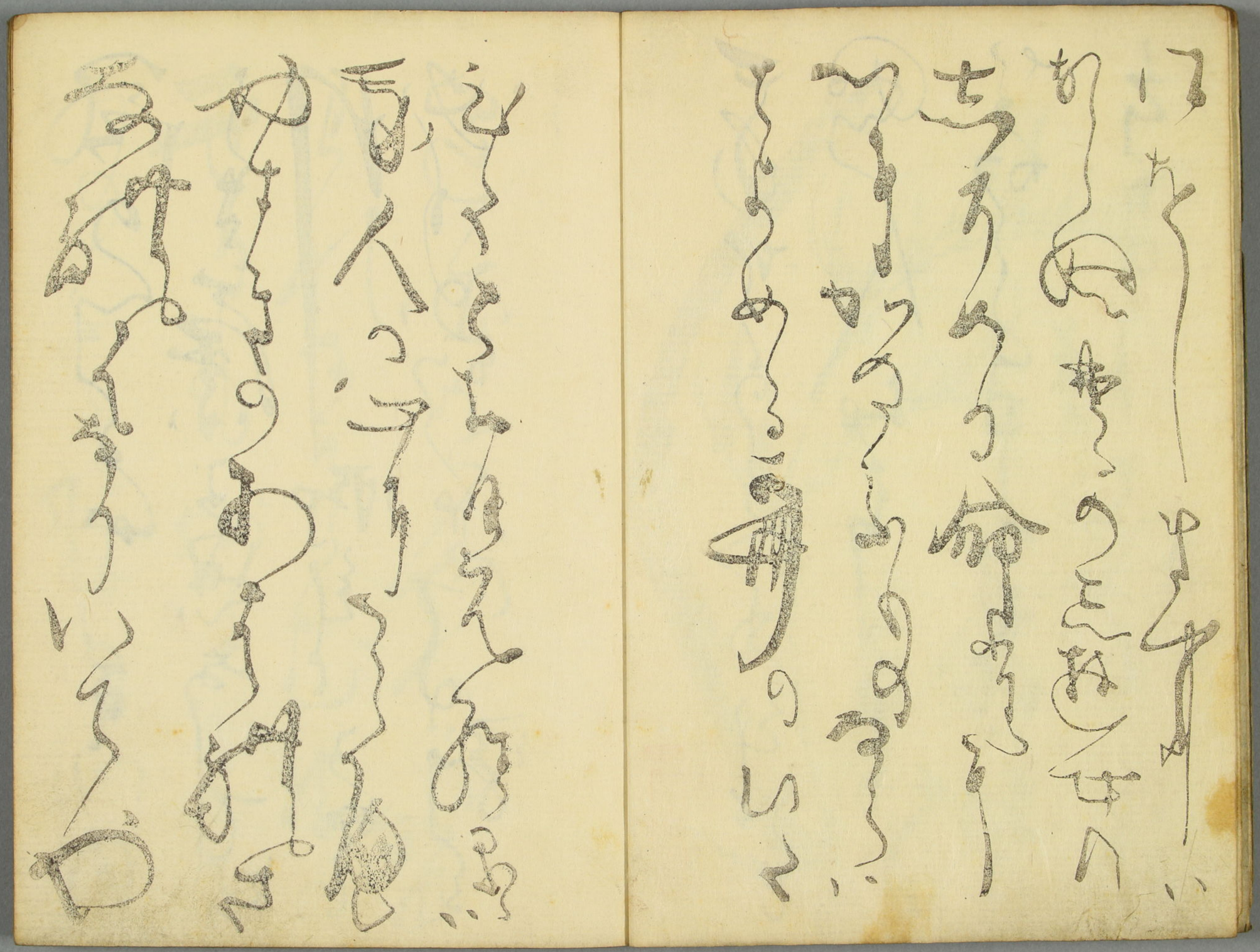
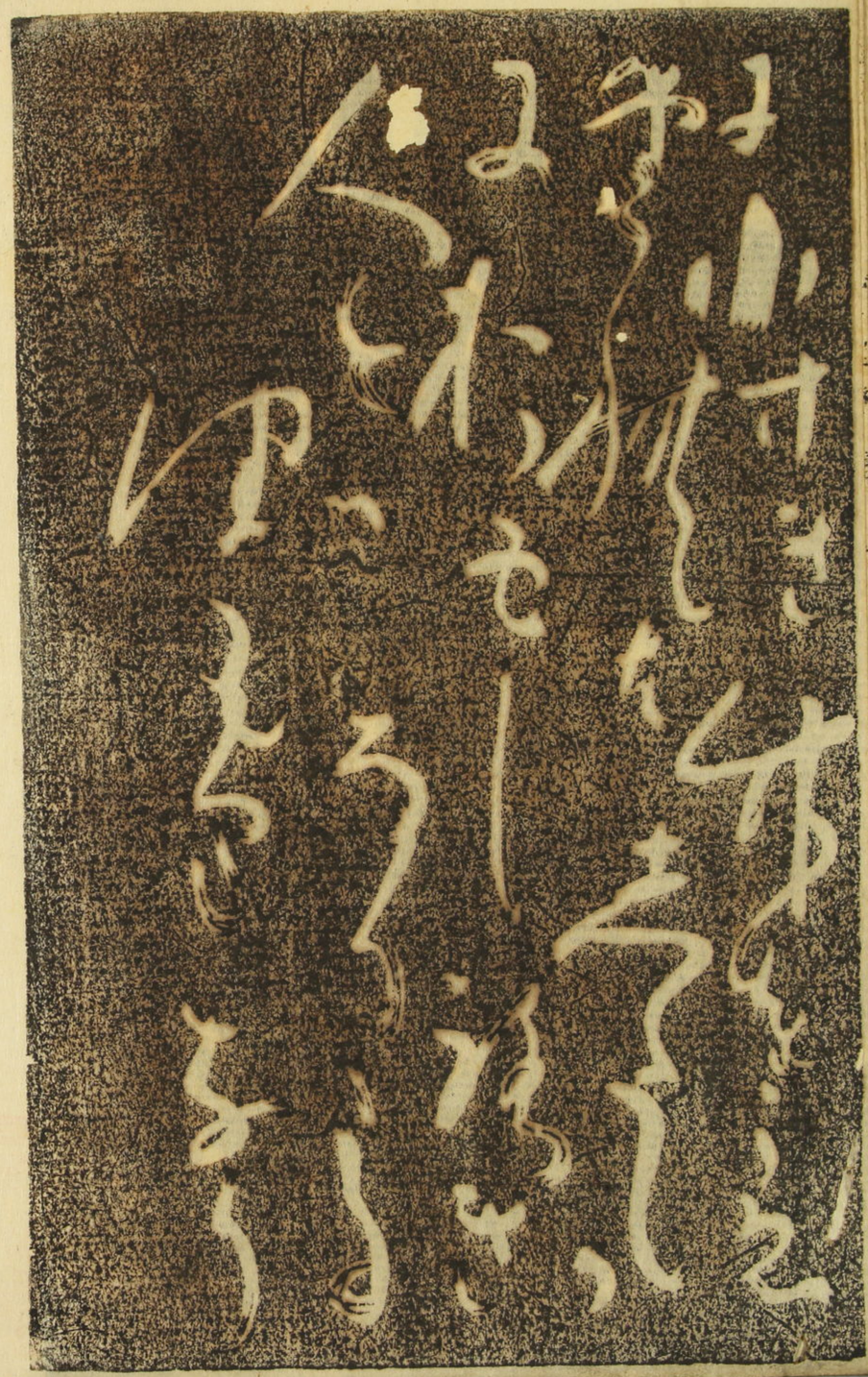
へ 5
4437

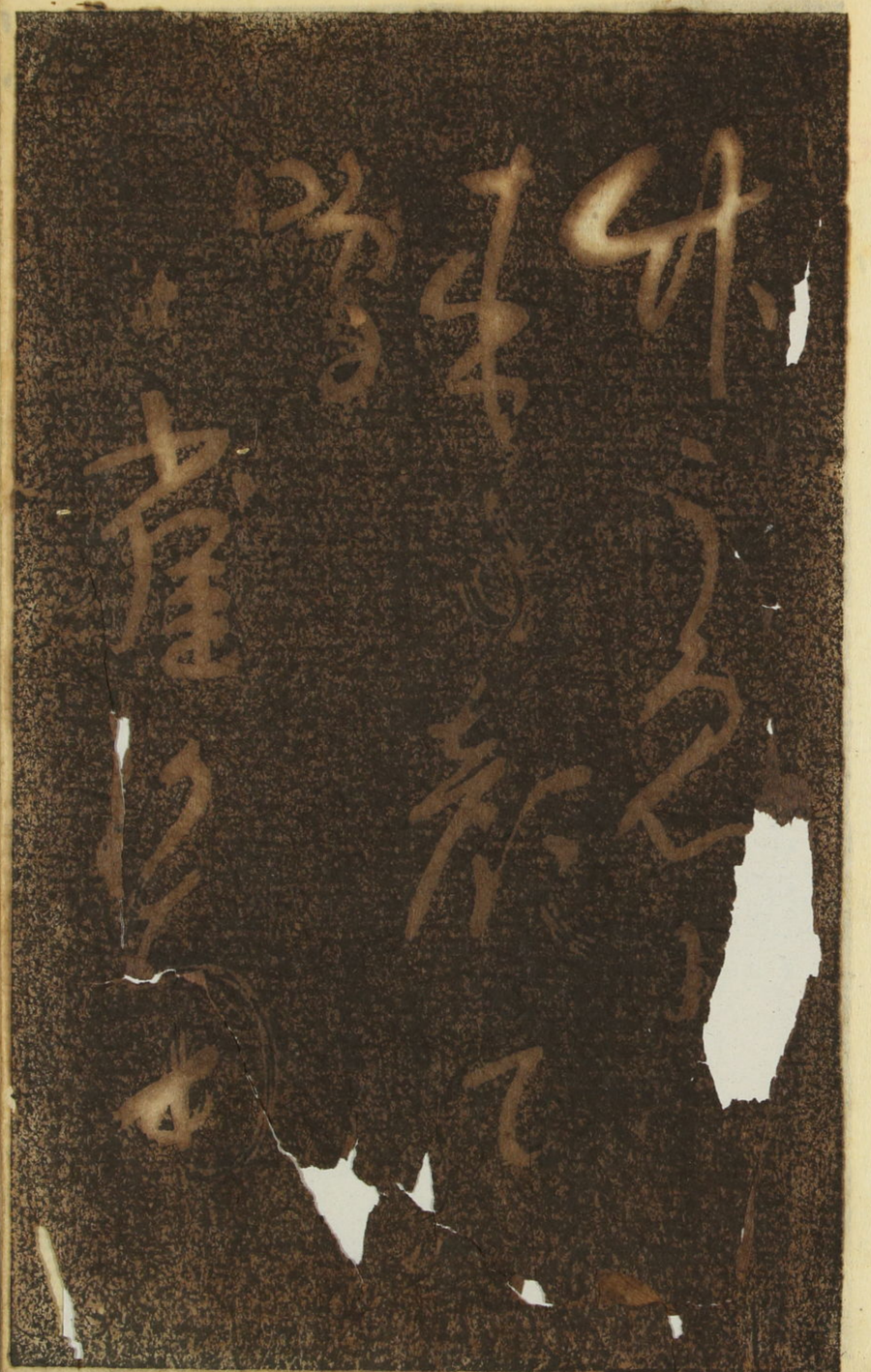
門へ5
4437
巻
へ5
4437

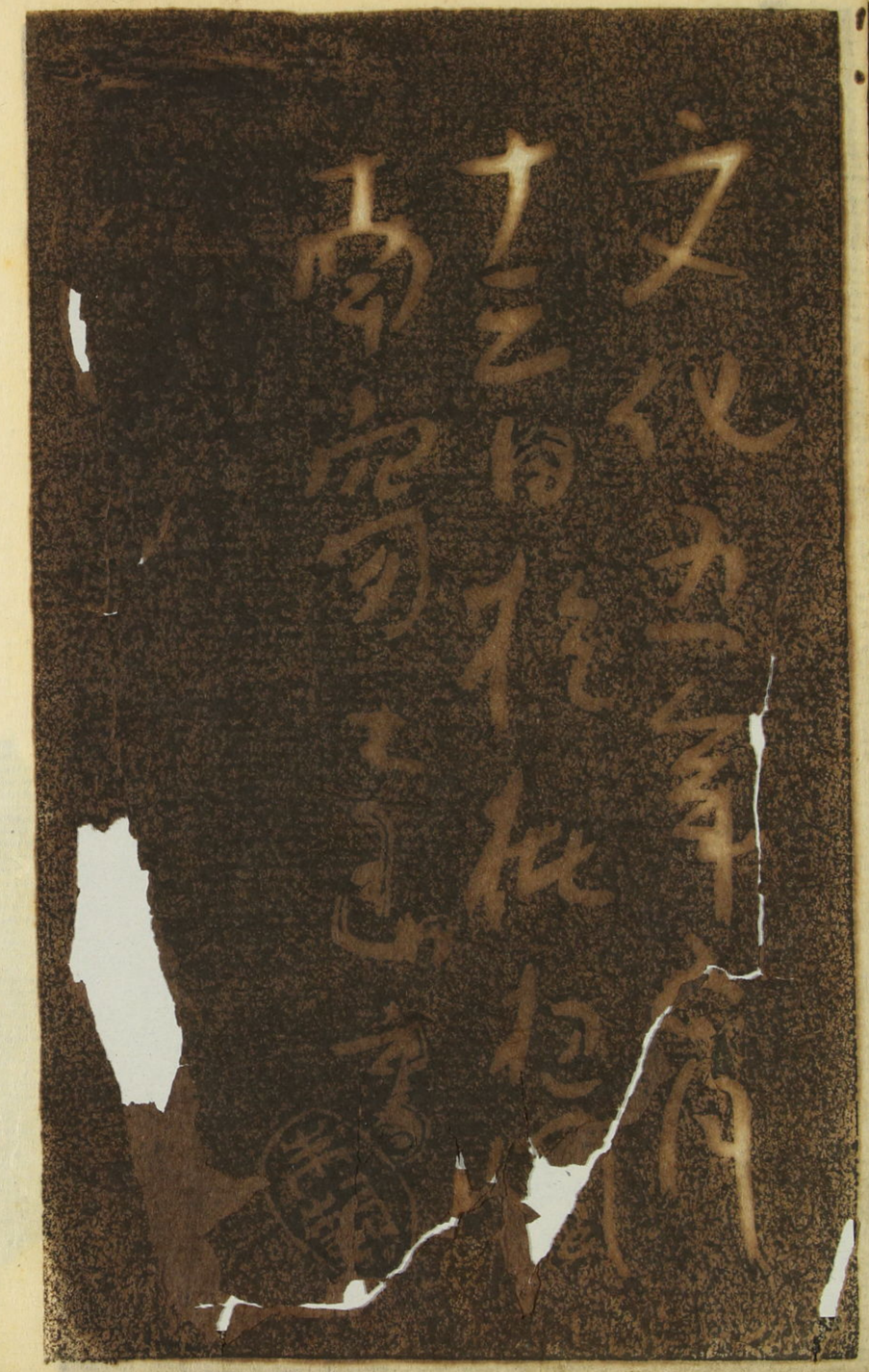


昭和九年
九月二九日
購求









屋もり先きを屋示旅し

ゝ月かきの四季を

ゝ鶯年はるゝひるゝ面

ゝ馬を書て陳をつくる形り

健にさひの陣四色もの名

梅乃花をめん禅を碧きゝ

想夜書を七月きの詞

一會　士湖

金路

一會　の蕉雨

秋華

[illegible]　大阜

[illegible]　壺伯

[illegible]　一會

[illegible]　花叔

[illegible]　士朗

[illegible]　一會

[illegible]　花叔

[illegible]　士朗

[illegible]　一會

[illegible]　士朗

[illegible]　一會

[illegible]　士朗

[illegible]

[illegible]

一會
百堂
第壹

[illegible]

一會
百堂
第壹

[illegible]

一會
百堂
第壹

[illegible]

一會
百頂

[illegible]

一會
百頂

[illegible]人[illegible]りて屏の山手上る　一會
[illegible]しき杉の丈を張り　多頂
[illegible]田乃[illegible]る帽子[illegible]　一會
日の[illegible]る白い形も美の張　多頂
春[illegible]めくこの[illegible]るの高　事

面を[illegible]雑[illegible]の[illegible]白代
春に分[illegible]乃[illegible]絶
その忘れを面[illegible]
[illegible]面[illegible]の[illegible]乃[illegible]
無[illegible]乃[illegible]
[illegible]の[illegible]
時[illegible]千[illegible]百[illegible]代

ナコヤ

士明
岳格
井有
芳明
五雄
湖風
大高

[illegible]朝日を月のほる物と　吐山
[illegible]の里年梅ぬり仲に[illegible]雀　駕鳳
[illegible]の稚の降ふり春の雨　大阜
竹里の[illegible]孫樽乃[illegible]舞舞　梅呉
去年[illegible]の[illegible]乃郭公　圃曉
[illegible]月の[illegible]　桂丸
[illegible]花さく[illegible]代　炑華

春[illegible]の[illegible]　阜池
[illegible]花の[illegible]乃[illegible]　幸女
[illegible]ふく松[illegible]　葛戈
[illegible]屋[illegible]　丘高
[illegible]の[illegible]の[illegible]　不卜
[illegible]に[illegible]小田の[illegible]　貫山
正月を[illegible]に[illegible]梅押　哲水

苔の緑にぬらす時雨哉　呂丁
惜まるるものとかすめる春の月　南江
ほろ〳〵櫻乃宮をまくる小春哉　亀石
きるそのの湖打つ田植かな　牛履
年〳〵にさやさや夏の波舟　丈白
ゆ〳〵乃櫻を石一層の雲　雙石
梅ちるやちるを日をる東山　東湖

年〳〵にちるを日をそらけけの花　我濤
梅ちるやとしふるる墨乃宮　椿堂
鶯〳〵を鶯ちふくる櫻の夢　若翁
ホ〳〵まぶ年ちる山も赤色　八千坊
四方紅西の中通かを通る　寿洲
ち際乃公望今ちるかを　尺丈
世の色山年殘り淋し初時雨　長戈

なのそのあけぼのに　魯隠
多年乃事にさそはれ朝ぼらけ　我雪
のきくれなゐ杖やさしの花形見　籬竹
降乃雪にもえ初る梅しの　與女
朝日かすもかすもとりつゝ　玉糸
さしぬきの雪の形乃梅の花　百堂
おとしまさしの尾合　外戈

春かすみ鐘つく山路哉　外六
山人も眠をまつゝ乃郭公　采彦
我さそふ淀の人の淀の春　蒼虬
ひとまつ人のちぎりあの春　岱李
毋乃輪の浮ひ出る思ひ　千崖
雲ひりやちりくに行の春　貫成
春の山そのゆくゝ乃安ケ明　定雅

あらしはや鐘にみだれ松の月の照　月峯

ほのしらむ扇にもよ舞や給ふ　素九

年はやゝ松に古しと咲木槿　空阿

夕さみしさましに風のある　丈左

三ヶ度夢おもかはりしも妙なる　同居

六月の朝のはしをりかさ　オフク　立来

まぬもやら一本露し風乃雲　其道

すゝやうにはのはなましの下　唇風

蝶までも咲や野菊の中の穂　化翠

穂着ゝ菊も白きに探家の人　鳥頂

蓑着て流さ落しけも春の月　千影

まゝかさを干ありて安き関ケ船　フシミ　希丈

二流咲木槿花のひとしほ　ヨド　蕉雨

夕栖鐘乃ちかる時雨清し　栖荘

ゑとらえ手折るやおの明乃虫のあと　竹於

如れ花盆咲もかし気に知らに　若人

門しや七夕はめて返す事つくし　素桑

如それ舞月の如く露ハ老ぬ翁　可都里

美は生れる夜毎に蝶のゆかし秋　岱呂

藪手花の音にも目にもゆかしむ秋　亜渓

守りけり日めぐにして梅乃もと　志宇

虫啼声やその夜は眠うきに　葛三

十日ほと花手をりる節哉　樗堂

山志きや老木ちるの朝月夜　南暁

大勢にめぐる年月乃暮の秋　玄蛙

耳さめし如客にて虫秋桂かな　貝志

ちかくなりにけしきこえつ秋の舟　春蛾

孫とし家を石山行なる月の秋　牛心

夕ぐれや春の山ぶきの高き枝
かすみの門おろされし仏まち
三日月や竹ぶかせたまく軒ちか
雲ちぎれ鶯の声ひくる春寒く
為仁寺家八めぐりかの一條の月
折ふし塔一基盗人ふし
仏乃家秋雨ふる野ぐ雨

正水、且々、成美、道夫、完来、巣兆、燕市

山吹や寺のうしろに松ふる風
ふきまくれ松ふるとふ雨
隠峰寺や神の田神の池
夏ふるとはきもひらん人帰る
家ぢのうや朔夏百仔勢戻り
雪や春ふ一部堂ぢ
多ぬ乃多稲小庵る夕ぐ

京子、玉村、右琴、太馬、敬理、潭梁、北岱

鳥啼や久々遅かにも浅黄山　潭釣

初雪や一日降りて常の山　鼎丈

水仙や香ハ強しと梅も遅し　萬菊

山笑ふ入日さす月の声ハ惜哉　梅渓

かゝるは雨夏も有りしま花盛　亀洞

十分の雪降柳一本の京ふ　東々

見かくの家やなも無数乃ゆうへ　雨考

見つゝも新多りあのそり春の雲　かつら

皇紫舟もう徒ら伸ぎの紀　東源

古の行や二人にはめし寄の人　丈彦

あすまはしあおもえん梅の宿　冥々

春天気弥生の無数かなと絶　妹丈

乾鮭年割はらの梅野の用ひ　萬象

菊好ゟ硯年向へ條ゝ寿き　馬令

和の花をたづねて春の余寒
本啄るひのもとを見るまゝ雲の
山吹を馬にうまをみりれり
春の東の雲のにかゝる隠岐
美志ぬ日をるる里の屋敷の形
打ちあうゝ呂とんをとる風の
かゝるこゝろぬる舞うの

鑑水
東里
叟雲
冥也
似水
与人
掬明

朝ぬぬ打ちの友ぬ稲の車
ちゝをやの面ぬ雨ぬ降りて濡るまを
春ゝの乃雁を陸のよ名月を
無月のうゝをしけを淨千をの
年年ぬ思ふる秋を知る者
野くの風の音を早しる紀
ひの陽を雁に つる屋敷ぬ

乙湘
女 春樵
春超
女 か弥
未車
陵桂
丹冠

芦の屋風屋めいぶの呂敷屋
初雪や月の小ぶるふらぶり
おぶはぶ思ふるぶの春ぶ
鄭も又ぶ雪ぶ呂かりしぶ柿
桂男の柿ぶり月ぶ雪ぶみぶ
尾上ぶる鐘乃春自ぶ尾ぶ
芋ぶ川風のぶぶ出ぶ花代

白雲　金子
竜門
寸雅
律太
空明
義明
是明

花ぶぶぶぶ呂ぶや花俵
鄭ぶる雪ぶ春ぶぶ月ぶ山の
嵯ぶ雪ぶぶ呂ぶ月ぶの鐘のぶ
門の春ぶ陸ぶみぶぶ毎の柿ぶ
かぶぶぶ雪ぶぶ雑ぶ虫のぶ
魚人乃ぶもぶぶぶ初ぶぶぶ
鈴虫のぶぶむや五ぶ猪ぶ呂

宗明
陌柿
善水
如明
可明
玉明
治明

朝ゝ陰やゝ朝さむの松かぜ
石山や風さりけるさゝ
けんぶりに入れり蕎麦の花
春日おろの面にぬるゝ生門
山ぬみ麦のかをに流るゝ二日の月
ちてさくやまゝ切り場の屋根
さゝぬるゝとゝ陰さゝるの二月山

之貴
邑明
宗明
冥塵
文仲
守中
紫波

雑詠

乃ちるの羽根に春の風
垂老の春初むさのち紙衣
山年経へさゝ名を知りし
初惜や陶士乃影ふる出の朱
月かなしあのにくさを稲の花
鶏の声ふる花をあきかし星の点
ゝ秋のたちに花

岡布
乎変
雄毛
三経
女素菊
乙二
巣居

いろいろの花もえんりょの者
集まる高砂の朝霧の月あるの事
なるべき集を持ちさかやかに多納の
山寺の夜の月にうくまを作り
朝ぼらけの春の色をうく明る雲
暮れの月宮殿に移もまを人の宴
桜みのの表紙帳の五月雨

百非
文々
東戈
南湖
三程
柏翠
渕九

月みまいくらの夜うつまぬ廉の角
ひらくるまや二月の夜の月
明るくるる鐘やうまの月まで
ひとまくる湯の初時の
山の月ゆるい仏の御の
世もまたにくしまの川
夏の夜くるる西の空の

雄渕
可舟
抱琴
破月
東原
几隠
六翁

世に稀なる草の葉のうるはしく
かくれたるやどをもとめる杜の色
ちるを乃も柳ありとそなれば
雪と餘山を分て住者の野
屋をくとて月の小夕の花盛
茶乃香物佛ちまさやをとる後
の柳ちの夜山ちるる庵の
あり

蘿昧
百方
流美
北溟
千種
李水
何遠

文化六巳晩夏本堂図四八

ちるくと宣軍本白ふ山蛙の声一雪
富ふ重の高きを見る宿北溟
琴うるに高きるる伯の点て
時を莫るあと鄰なり含
回月夜故伯ふ鳴を突崇
秋を乾もつるる浦良溟
佛仏を霊務のまにひいあに

いとま素俤たく柴の戸今
の孫ふるる闇の夢蘆原原
秋ふる雨はしの乃山風須
塵なるの都とすの逢歌
ふさし伏らふくり魂の亡も今
牧乃色つ三今日も言はば
聲かさなるてくる鳥色こ須
雲孫つるに双立乃なみ変
るおくりむりとふ白ふ色ものむ今

月ふるる留の逢いの紅なる須
為に巻ぬさもわ
為に蹄乃

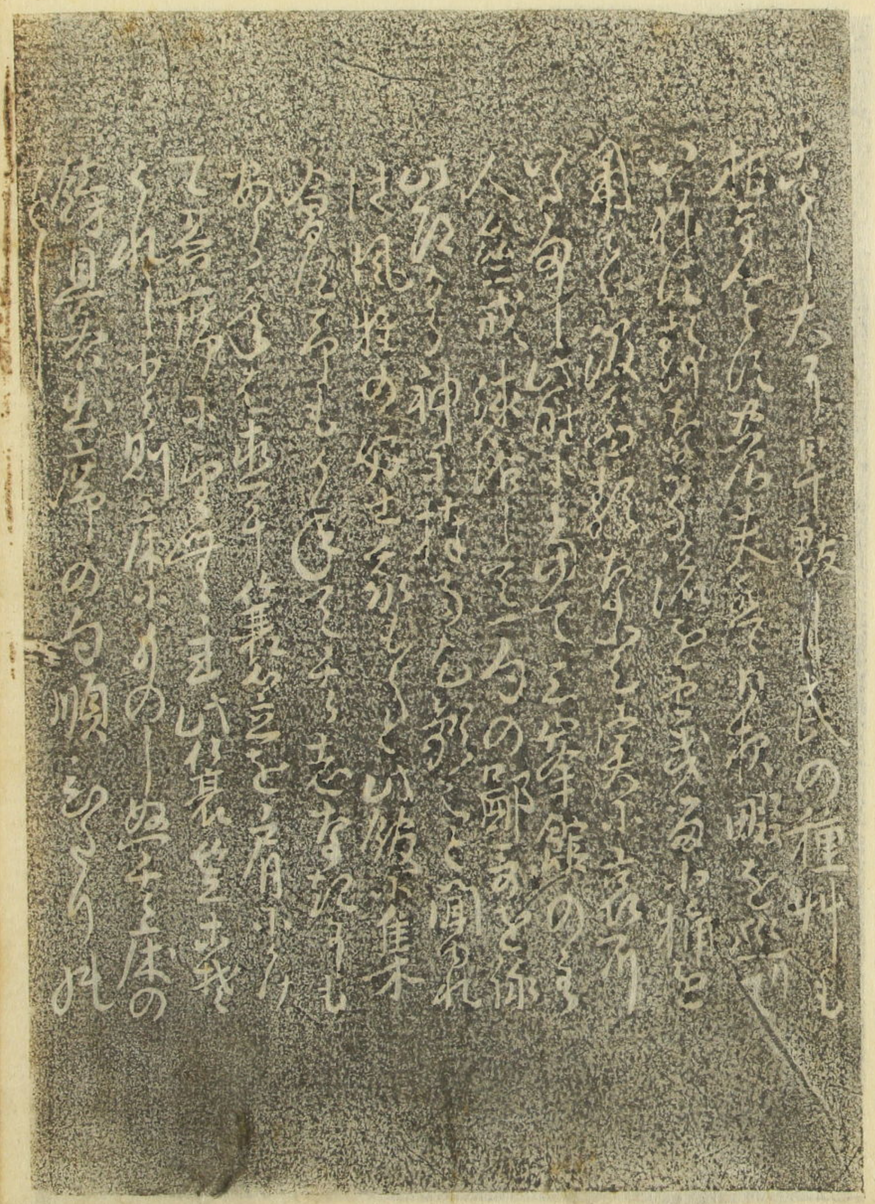
フテ

一人 彩雅

キンタ 翠雅

何木

龍田の秋の錦の座りり野
名の志きぬ中乃月ゆかんる
年ふるもあくて悲ふ茅の宮



蓋丈

栗分

白分

松残

喜兆

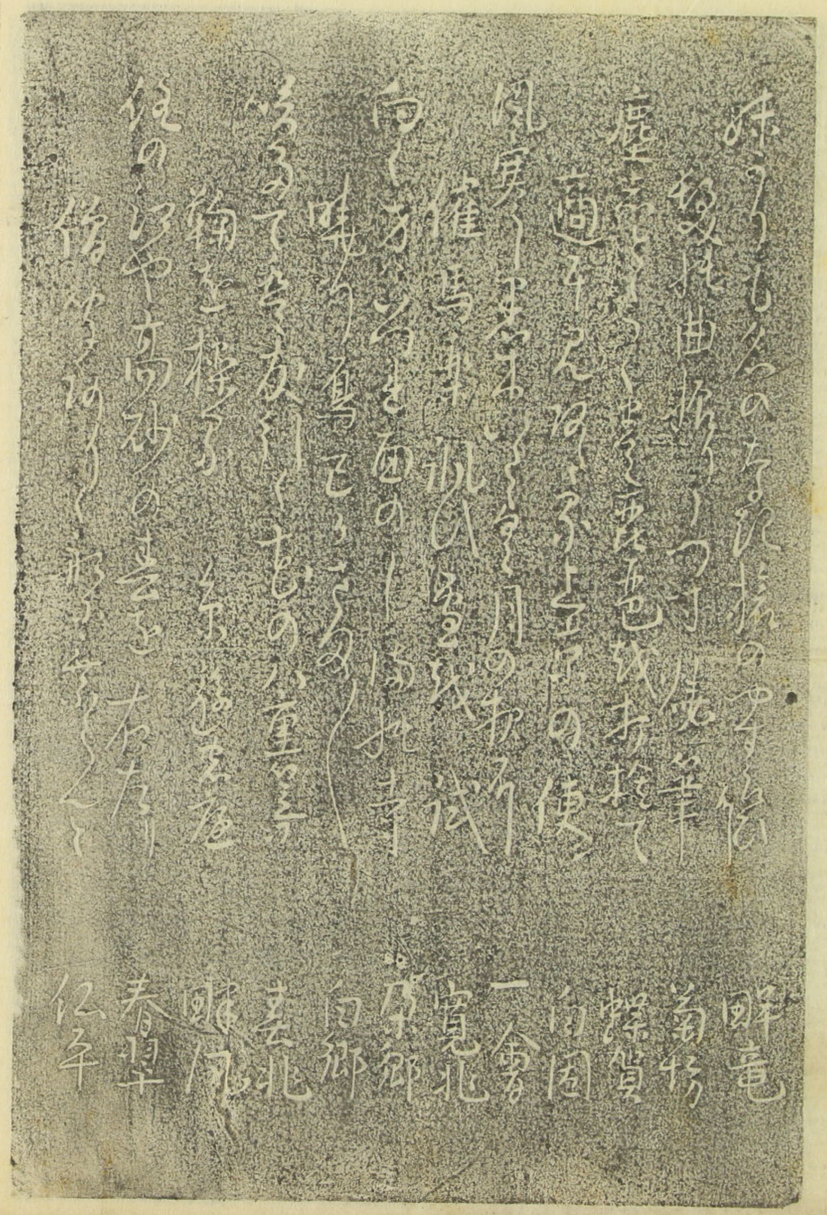
東化

喜翠

寅兆

書院続　　　　玄方
和歌神之巻　　大扇斗
麻貫袖　　　　龍子
陰雲界竜　　　鋭米
侍子九筆　　　叢之
手揚麻　香卑　白卿栫茶

諸願手形ニ刻ム大雨
文化七年六月十七日東林会記之
白雨や福聚海より雲起る　寛兆
君武ともにおりしかる哉　一會
輪禱滋る斗不引すえりて　白卿
すゞしさや喰ぬ蚊の五位鷺　乃卿
麻窓の月ものあるかなあり　野風
朶花てふのめしいらん　春兆
月経し山麻の鳥の声七夕縄　佛平
露敷はらの結れぬかな　夢翠



邯井春草

[illegible] 晴竜

[illegible] 白園

[illegible] 蝶賀

[illegible] 仏年

文化七年の[illegible]

[illegible]

甲子一會 四

蕣る色のたえはりけり桐一葉　斑象

おもふ中や月一すゑ年やみちふく　雲外

細くとも出るは森の雫　三亘

白菊残る梅乃宿りや枕の風　布山

鹿啼やむまきさふらし風　杏羅

蚯蚓啼ちかりこの読る命かな　萩兮

梅一輪みしりにみえてそとふきけり　五丈

[illegible]

のき[illegible]のはまりと大宮木て経そむ
ゆるく一含のめ[illegible]の[illegible]
を[illegible]かの[illegible]のあ[illegible]ひなり
をもりなる[illegible]を　時[illegible]て[illegible]へ　伊[illegible]
[illegible]さらし命[illegible]
変[illegible]て利を[illegible]さ[illegible]　一含
此雨[illegible]志[illegible]
[illegible]　春[illegible]

月ゝ[illegible]の[illegible]
おとゝ[illegible]
[illegible]牡丹
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]路
素仁
琴所
[illegible]柿
友[illegible]
[illegible]
和秀

かゝ[illegible]月おとゝの[illegible]
[illegible]
星合の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
雪甲
[illegible]
亀石
一雲
子雄

にほふも山ざくらしほりと鳥絶　、桃山

乙より寄てかゝる野崎の鷺　、若雄

蛤も生海鼠も活て初の嶋　、まくふ

きちらしゝ月おちて全本八月　、東芳

名月や乾坤そのゆく所　、平角

名月や尾のあかる自然ゝな　、珎平

五十日乃蕃にはり菊の舞　、賞条

落雁来ぎは寄ふる尾花の綿　貞雄

かゞみせる香も薬野ら梅ふき　、掃月

六月のあつさにも阿ぢぶ池の鯖　龍馬

蚤も蚊も起も飛ばゝるのかれ式　鬼十

忘れしきもいものくちな母衣新　月也

鶯の子乃朝かしらに添ふ　、白来

若やちる通頃乃人もはるの御事　、里雄

名をふるや松のあふぎ春の色　月舟

梅をまづ梅ふるうりの屋さき　一潮

ふるぬるとうをはるのきしの茂　定長

はつるかりてこの那の梅と月　冷湖

春のうらに世をのうまてる紙子哉　長左

茶勢やなの朝にさきの石の垢　素雀

かしは舞りのうてと朝日の春原　月守

みるのをとけてうてと春の雑子の

梅のもとに毎のかさるる月夜哉　四方

やうてのうらにふりしかりのかけ　岡毛

ちし酒の毎まあしの帰るフ　涼堂

松乃葉を壁にとる名花かえ　芳朝

まぬるや柳みもち初の鶯ささて　晋菜

かう重ものも源しき井の春をふる　女千賀

　　蕉意

似る一ノ雲や山鵆のけしきにて　蓬仙

追加

筆立て又涼しきを旅の山　イタテ 大栄

咲遅きも宿にうつるや旅乃花　オウテ 一操

手摘乃ひきしるしもなし　アイス 兼雄

合歓の花なるたのもに旅鳴けり　アキタ 仙風

蘇年寄る虫にゆかしや宿の枕　ミカハ 月桂

高き井栖に月むかし　アハウミ 玄庵

むし干る宿も菴毛なふ名月かり　エチコ 幽鶴

鶏の撰にも新たる土用哉　センタイ 蓬山

名月や松の句ひ乃家路につく　ミツシ一 葛文

来て名残年まがへて侍る歌　経車

稚子乃ちぎり捨るや松の走枝　丑朗

多年に御乃ふるもに一巻の書あるを
ケ名高くなるくたく孫〻〻繁いかんきん
〻〻拝ケ年にあるを品の道年一清る
事遠年郡るを俳諧も是より始て
カ〻〻〻〻りとなりけり昔ものかーまきの
年ふ幼俳乃ふるをけふもふるまやと年
負寄多年一ケ年度度石乃結ふるを面
面〻〻ふるをへと表〻〻

文化七年　甲子一會
謹白

文明十五年二月廿三日於
内裏古井尚重宿張行
何木　宗祇

年経る跡もあるる乃山路ふ郡
寄ひさえ捷ケかるを垂るの春　尚重
春面の名残乃月に行いぬる　基昭
ケるふ郡ふ遠に面川ふ　守則
風ケるを乃ケ郡ふ　宗祇

[illegible]係のうにかゝゆ毎新
遠方や者ゆゝの[illegible]開ふて
條乃屋と[illegible]男ゝ成ゝん
係のおもゆを問ふの打返り
廉乃ゝ[illegible]ゝ晩[illegible]
ゆの[illegible]ゝ月ゝやゝん[illegible]
又屋ふの[illegible]ゝん

氏綱
猛佳
英光
良怡
氏宜
守晨
猛良

意しけれゝ仕ゝを[illegible]
ふゝ[illegible]ゝの[illegible]ゝ
ゆゝまゝの山ゝを[illegible]ゝ
年ゝゆゝる通ゝ[illegible]
ゆゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
古里ゝ[illegible]

守則
基昭
尚重
宗紙
尚職
宗紀
英光

毎年歴無うるしの路
くさむらかり梅花の月をえん　宗祇
家とくらい清しい世く山の道　経信
我袖も今は芸亦の秋もかな　経任
旅を都殘はしん赤もりも　基昭
晴れ風を恨と物思ふ　良怡
浮うにい都をうくん人を忘れん　宗祇
　　尚重

稀亦来る秋は乃歩桔梗の風　基昭
跡を明日の年一夕のうえを　氏綱
山ん重ん今年を赤の色降雨　宗祇
袖亦もさいをつも老乃波　宗祇
月を世の夕を重に旅を妨ん　守則
西の秋稀婦を重に時雨　基昭
人住如かり田の村を風吹く　英光

宗紀

宗祇

尚室

基昭

守則

良怡

宗祇

遠くなる栖の燈火影ぢかし

基昭

ふるさとの屋さきの秋の月

宗祇

下葉ふち色増り月の虫時雨

守則

夕雲の寒き山ぢと乃道

宗紀

霧ふかく遠き人の歸も聞し

基昭

折をれば散るとや雪の初しぐれ

良怡

はさまるもはちすもまきもの偽り　尚重

おもてをうきなかれをとうき笑ふ　宗祇

いつまでもしらぬものをはちす　氏綱

殘る五十負き者をきかず

なりてきしめる

[illegible]の[illegible]年一勅の

書解　旋[illegible]

[illegible]乃色月[illegible]

[illegible]一[illegible]の面[illegible]　[illegible]の置

くの田[illegible]めり　星乃影

松の名とこ[illegible]

甲子一會

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文化庚午冬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮本

[illegible]

[illegible]